



玉子王子 著

一章 強引客引き娘はタ○キンを蹴って客を引きずり込む

元磯の宿。

道の左右に宿が立ち並ぶ宿場の町。

着物の人々が道の前後から町に入ってくる。

日も暮れつつあり、これからが宿場町が本来の姿を見せる時だ。

そこの大きめの女郎屋。

入り口に、一人の若者が座っている。学生服のような妙な着物を着た侍。

「一刀斎さま、邪魔ですよ」

「で？ っていう」

八幡一刀斎のどうしようもない返答に、女郎らしき女がため息をつく。

「呼び込みなんて見ても仕方ないでしょ」

「いや、これが楽しいんだよ。みんな必死だからね」

「必死に決まってるでしょ。客は欲しいし、自分の客にならないまでもね、宿の客が増えるに越したことはないんだよ」

「客が欲しいか……稲ちゃんは好きモノだねえ、でへへへ」

「ふざけたこと言っているとキャン玉蹴り潰すよ！」

膝を思わず締める一刀斎。

どんな怪我でも治る霊薬「自衛丸」が安く出回っている世界である。

——こんなことで蹴るか……ってことで、女どもは普通に玉蹴ってくるからな。自分は付いてないから、蹴り返されないからって……

「あ、稲さん一刀斎さまのおキンキン潰すんですか？ 私にも潰させてください！」

「私も！ こいつやるだけやっていっつもつけなんだもん」



私も！ こいつ
やるだけやって
「つけ」なんだもん

あ、稲さん
一刀齋さまの
おキンキン潰すんですか？
私にも潰させてください！

こんなことで蹴るか……
ってことで、女どもは普通に
玉蹴ってくるからな。
自分は付いてないから、
蹴り返されないからって……

「チ○コデカすぎて疲れるしね！」

「そうそう！ こうだもん」

一物の長さにしては異様な幅を手で示す女郎。

「正直、どのぐらいの長さなんですか一刀齋さま」

「一尺（約30センチ）ある」

「ぎゃははは！ 計ってた！」

「キモ！ 一刀齋さまキモ！」

パンパンと股間を叩きつつ笑う女郎たち。若い子は十代、一番上の稲でも二十少しである、ノリがよく元気であった。

頬が熱くなるのを感じる一刀齋。

——こ、こいつら簡単に……文句あるならタ○キン狙うって脅しか？ 女とは言え、やっぱり股間叩いてるのを見るのはキュッと来る、玉が……アレで平気って、玉がないにしても一樣生殖器で弱そうなものだが……マジで女の股間は頑丈なんだな。

「あれ、どうしたんですか一刀齋さま」

「自分なら今の「パンパン」で女郎に就職可能になっちゃうのに……女の子様のお股は無敵でいいなあ……とか思ってる？」

腰を突き出し、平らな着物の前を示す女郎。

ニヤニヤしつつ、見下ろす。

「うらやましいですか？ 武術家としても魅力でしょ？ 女の子の、頑丈なこの辺が。あー、俺もタ
○キンさえなければ負けなかった戦いがいくつもあるのになー、って思ってるんでしょ？」

「お、思うわけない」

「そうですかあ？ おっと、お客さん」

女郎たちが宿を出る。

前を通る男にしがみつく。

「お客さーん、私たちどうですか？」

「サービスしますよ」

「サービスって！ 時代劇でまずくね？」

「南蛮とも交易があるから言葉も入ってきてんのよ。むしろ「時代劇」のほうがまずいでしょうが」
わけのわからないことを言いつつ、引っ張る。

はじめは乗り気でない感じの客。

それを感じ取るや、稲がするっと音もなく近づく。

そして。

「そうだな、もうちょっとほかの店も……はぐっ！」

客候補がへコっと腰を引き、目を剥く。

歩く動きに紛れて、軽く稲の膝が股間に減り込んでいた。

「あらあ、お客さんどうかされました？」

「お、おま……きん、きん……」

汗を噴き出し、股間を抑える。

彼の目には稲が歩いていて偶然ぶつかったように見えた。

が、もちろんわざとである。

心配げな顔をしつつ、内心にんまりと笑う稲。

——うふふ、あんなに軽一く入れたのに、やっぱりここは男の急所……一刀斎さまみたいな武術の
達人でも、こういう普通の人でも、男の人はみんな同じ……ここやられると「おぐっ！」「は
ぐっ！」で、腰引いて動けなくなっちゃう……こうしちゃえばこの隙に何でもできちゃうわ。



「き、きん、きん……」

急所攻撃を受けたことを必死で訴える男。

それをみて、突如頬を押さえ、顔を赤らめる稲。

「えええ、やだ！ お客さん何言いだすの！ おキンキン舐め舐めしてくれるかなんて！」

「い、いや、いってな……」

「もちろんやっちゃいますよー！ お客さん一名ごあんなーい！」

女郎二人が左右で腕を掴む。

掴みつつ、力の強いほうが着物の隙間から帯の下に手を突っ込む。

「あ、ちょ……はうっ」

「いやーん、お客様ご立派あ。このこのお客様の一物、大きいよー？」

「うそお、じゃあちょっとお値段負けちゃうから私を指名してくださいよー」

「私だって負けちゃう、大きいおチンチ○には女は負けるしかないもん」

一物を褒められているが、握られているものは睾丸である。

禪の下のそれをコロコロと女の指に転がされている。

頬を引きつらせつつ、露骨な巨根褒めに紅潮もさせる。

——こ、こいつら、いきなりキ○タマは蹴るし、玉は握るし……でも、こんなふうに言われて悪い気はしないな、別に俺の普通だけど……人前でこういうこと言われるのはうん、悪い気はしない。ど

うせどこかに泊まるんだし……ここでいいかな……別に無理に断っても金潰しってわけでもないだろうけど……

もちろん断っても玉潰しなどありえない。霊薬で一瞬にして治るにしても潰す理由はない。

ただ、事故に見せかけもう一発、金的ぐらいはあるかもしれないと、握られた玉から感じないでもない客。

それらを見つつ、軽く頷いてしまう一刀斎。

——宿の客引きはどこ行っても強引だが……このレベルは珍しいよな。俺ももろ食らった……

玉竿両方がことのほか巨大な一刀斎は、目算を誤られてその場で崩れ落ちるぐらいの金的をくらわされることとなった。

それが縁で、なんとなく今用心棒に置いてもらっている。

——ここならうまく言えば女もタダだし……もうしばらくいて信頼を得てから、金目のモノパクっていか。

外道侍らしい思考。

と、次の客にまたも偶然を装った稲の金的。

若い男と少し年上の二人連れ。前を歩く若者のほうが身なりがいい。

その若者に近づき、すり抜けざまに慣れた感じで膝を減り込ませる。避けようとしてどちらに避けるか迷い、当たってしまった感じだ。うまい。

腰を引く若者。

「はほっ！ おおっ！」

「ぷっ、あ、どうかされましたか！」

笑う稲。稲だけではなく、周りの仲間の女郎たちも、他の宿の女郎も、旅人の中の女たちも、みな股間を押さえる男の姿に、おおかれ少なかれ笑っていた。

その姿に、顔を赤くする若者。

「はんぐうううう、どうかされましたかじゃねえ！ た、玉蹴った……玉蹴っただろ！」

割と元気な若い男。

目の細かそうな布の着物を着ている。ちょっと金持ちそうだ。

横には使用人だか付き添いだかの男。

元気そうな姿を見て、少し離れたところの女郎二人が話す。

「元気ね。キンキン蹴られたのに」

「一刀斎さまは一発で悶絶だったのに」

「稲さんの「キンキン偶然蹴り」は芸術よ、蹴り自体は同じはず……ってことは」

「あは、あの人小さいんだ」

「どうしてくれんだよ！」

叫ぶ金持ちそうな若者。

「すいません！ 偶然とはいえ……足が太ももに当たってしまっ」

「ふ、太ももじゃねえ！」

「え、それじゃどこに？」

「ここだよ！」

「え！？ やだ……お股に！ ごめんなさい、男の人の大事な所に」

「そ、そうだよ」

「金の玉に」

「そう」

「お・キ・〇・タ・マ、に当っちゃったんですね」

「ふ、あの人キ〇タマやられたんだって」

「足が」

「ああ、稲またやったんだ」

「玉蹴りの稲」

「ていうか、タマタマやれたら男の人ってマジで余裕なくなるよね！」

「そりゃ大事なところだもん、おキンキンは、男の命だもんねー」

「この前も向こうの峠道で、一人歩いてたら変なのに抱き着かれて、やられそうになったからキ〇タマ握り潰してやったわ。三回ほど」

「三回！ やだ、優しー！ 霊薬一回飲ませたら、一日中無限再生なんだから私ならたった三回で許すわけないよ。最低五回は去勢」

「時間なかったのよ。余裕があれば、あと一〇回は去勢&再生の段だったのに」

他所の女郎や旅人、その他宿場町の住人などからなる道行く女たちは楽しげだった。男らは股間を心なしか庇うように、恐怖と羞恥の混じった妙な顔をしている。

女らがニヤニヤしながら見てくるのに、金持ちの男が顔を真っ赤にする。

「な、なんだよお前ら」

「わかりました、私も女。逃げも隠れもしません」

「そ、そうか。どうしてくれる」

「同じように、ここを蹴ってください結構です」

膝を開き、股間を突き出す。

一瞬周りの女たちが黙り込む。

ついで爆発。

「ぎゃはは！ これは公平ねえ！」

「同じことするんだもんね！」

「いやん、稲のタマタマ潰れちゃう！」

「はおおお！ とか言ってね！ こんなふうに腰引いてさ！」

股間を抑え、腰を引いて尻をフリフリと大げさに振る向かいの店の女郎。

手を叩く仲間の女郎。

「うまいうまい！ こうよね、こう！ はふっ！ はふっ！」

「玉だけは許して！」

自分は女だからやれないという圧倒的優位から、金的を食らった男の姿を嘲笑う女たち。

店の前にいる女郎たちはもとより、旅人の女たちまで足を止めて真似をする始末。

離れていく男たちの中、動くわけにもいかない金持ちそうな若者と連れが女たちの笑い声の中股間を縮ませるしかない。

「一個だけは残してくれ！ とか必死になるよね、片金潰された奴って」

「どーせすぐ治るんだからいいじゃん。霊薬一飲みで二個玉再生。一個しか潰れてなくても一飲みなんだから、もったいないじゃん、片金で霊薬使うのは。っていうか……効果は一日続くんだからさ、どうせ飲むならまず二個玉潰す、そして薬が効いてる間はどしどし潰しまくる……これでしょ？　これが霊薬の正しい使い方でしょうが」

「それな！　片金の時点で飲んで、効果が続いててももう潰さないとか……なんで男ってそんなもったいない使い方したがるのかねえ」

「私が男ならついでにチン○ンちゃん切って、っていうねえ。それも治るんだし」

「この前浮気されたから玉蹴りの上、裁縫ハサミでおチ○ポ根元からちゃん切ってやったわ」

「でもまだ付き合ってるでしょ」

「だって好きだもん……」

「結局のろけかよ！」

「おしゃぶりするときに、この前は切っちゃってごめんね……っていうと、キュッとタマタマ縮んでかわいいのよ！　っていうかあれ以来優しくなってくれて……」

「女が男を支配するには、チ○コを切っちゃえてことね。どうせ簡単に治るんだから、またいつでも切れるんだって思わせれば……」

金的の真似をやめ、今度は股間の前に指で挟みを作り、チョキチョキと動かす。

真似も、そのハサミも、やりながらちらちらと近くの男たちの反応をうかがうのも忘れない。

金持ちと連れ。

「さあ、蹴って蹴って」

「ちょ、ま、マジかよ？」

チラ、と連れを見るが、連れも股間を押さえて離れる。自分が蹴られることになっては文字通りたまらない。

これが女なら、前に出られるだろう、自分はどうあっても玉蹴りは食らわないのだから。

しかし同じ男では、出られない。

「ぼ、坊ちゃん、よくわかりませんが、頑張ってください！」

「何を！？　おい姉ちゃん、股間蹴ってくれとか、意味わからねーよ！」

眉を顰める稲。

「何言ってるのよ？　これは一回ずつ股間蹴っていく公平極まりない**闇のゲーム**でしょうが」

「え？　何それ？」

「さー、どっちが先にダウンするかなー」

「そりゃもちろん稲さんでしょ。男と女じゃ力違いすぎるもん」

「蹴りあいでも男の人に勝てるわけないよ」

「だよねー、でもまあ、私も頑張るけどね……さ、蹴って」

腰を開き、股間への蹴りを要求する稲。

震える金持ちそうな若者。

——な、なんだこいつ、こんな……

蹴るわけがない。

しかし、周囲。

取り囲む女たちは完全に出来上がっていた。

酒でも飲んでいるのかと思えるような興奮具合。

拳を突き上げ、唾を飛ばす。

「さっさと蹴りやがれ腐れタ○キンが！」

「けーれ！ けーれ！ おマ○コけーれ！」

「男のくせに怖気づいてんじゃねー！」

「キ○タマついてんの？ それでも男の命ぶら下げてんの？」

「ついてねーんじゃね？ さっきので潰れてんのかもよ！」

「ついてるなら見せてみろよオラオラ！」

「タマタマ蹴られておいて、お返しのマンマン蹴りすらできない玉無し野郎は絶対短小包茎でしよ！」



ビク、と頬を引きつらせる短小包茎の若者。

「お、お前らふざけ……」

「どっちだ、どっちだ！？ マ○コ蹴る？ 蹴らない？」

「男なら、蹴れ」

「蹴らずに男だってんなら、証拠見せてみろよ」

「そうそう、ぶらーんとね、ご立派なモノ」

「絶対小さいよこいつ」

股間を庇う。

その動きをみて、ちらっと女たちが目くばせしあう。

「うわ、今の」

「ほんとにちっさいんだー」

「まあデカけりゃいいってもんじゃないけどね。強いしエッチもうまいしチ○ポも超デカイけど、どうしようもないクソ虫野郎もいるもんね。……いや、一般論ね？」

「あー、いるいる。そういうクソ野郎。エッチ代もろくに払わねーくせに……いつかキ○タマ潰す」

「っていうか今晚あたりみんなで寝込み襲う？」

「いいねえ、いくらお強い男性様でも、女一〇人に抑え込まれたら身動き取れるわけないもん」

「あとはタ○キンをこうね、ギュッと握って……男の急所を握り潰すと」

「いくら強い男でもタマタマ握り潰されたらお終いだよねー。男としても終了だよねー」

チラ、と宿のほうを見る女郎たち。

入り口のあたりに立っている一刀斎。声は聞こえていないが、なんとなく膝を締める。

「見てみて、股間ガード」

「女には一生必要ない動作ねえ」

「だっせー。男がやる一番カッコわり一格好よね、あれ」

「いや、でも切実だと思うよ。ここは急所なんだから」

「っていうか、そろそろ坊ちゃん、どうするか決めてよ？」

「一回ぶつけちゃったんだから、そっちも蹴り返していいのよ。遠慮することないのよ」

稲。

——当てたお詫びにサービスするから宿にどうぞ、とでもいえば話は早そうだけど、それだと集まっている他の宿の子たちにとっては尻すぼみだもんね。別に尻すぼみでもいいんだけど……

「ほらほら、早く蹴らないと……立派なモノ見られちゃうよ？」

口にぶつといモノを啜える時のように、人差し指と親指で輪を作る稲。指と指が合わない、巨大リング。

「うう、わ、わかった、蹴る」

「そう来なくちゃ！」

「それじゃ、蹴るぞ」

足を引く。

引きつつ、一瞬で考える。

——蹴れば、また蹴り返してくるかもしれねえ。思いきり行って、倒すか？ いや、それはそれで周りの女が切れるかも、ここは明らかに軽くいくべきだ。かるーく、それでこの話は終わり！ 決まりだ！

大股開きの稲。

その股間に、ポンと草履を履いた足がぶつかる。

軽い軽い、軽すぎる。どれだけビビりまくっているのかというような蹴り。

よほど蹴り返されたくないのだろう。

当然のことといえた。

——よし、ドンピシャ！ うまく加減できたぞ！

目を輝かせる金持ちそうな若者。

瞬間。

「はぐううっ！」

腰を引く稲。

口を鯁張らせ、股間を押さえる。

「おブグリがああああ！ 男の大事なキ〇タマお急所がああああ！」

尻を振る。

これ見よがしに振りつつ、その場で回転、舞台役者のように全方位に顔を見せる。

周りで女たちが手を叩く。

「ぎゃはは！ あれはキ〇タマ潰れたわね！」

「よっ、今日から女の子！」

「前からだし！」

蹴った金持ちの若者がたじろぐ。

「う、嘘だああ！ そんな痛いわけねえ！」

「あ、それ女の子のセリフですから」

「キ〇タマって、そんなに痛くないでしょ？ 急所は急所なんだろうけど、絶対盛ってますよね？ 大げさに言ってるんでしょ。女にはわからないと思って……金的攻撃を遠慮してもらおうってさ」

「金的はガチで痛てえよ！」

「そ、その通り。坊ちゃんの……はぐっ！」

パシ、と横の女郎が、肩でも叩くように連れの股間を弾く。

「ほぐうううう！」

腰を引き、口を鯁張らせる。喝采する女たち。

「さっすが！」

「迫真の演技ね！ やっぱり金的の演技だけは、リアル男子にはかなわないわ」

「いや、演技じゃねーし、あれ！」

「いやいや、大げさに盛ってる分は演技でしょうが」

「ぎゅ、牛次っ！」

「ふんぐうううう、お、お前らふざけ。あ、ちょっとま……」

「はいはい静かにしましょうね」

「っていうか「お前」とかいった？ お前にお前呼ばわりされる筋合いはありませんーみたいな！」

わらわらと、股間を押さえて動けない牛次の周りに集まる女たち。腕を持ち、くの字の体を伸ばさせる。

前に回る一人の女郎。

震える牛次の前で、自分のフラットな股間をパンパンと叩き、これ見よがしに牛次のふくらみのある股間を見る。

「むっぼうびな一、金ちゃんを一」

「ふったつとも一、蹴り潰し一」

妙な**去勢歌**に震える牛次。

「あ、す、すいませんでした！」

「ん、どうしてほしい？」

「ど、どうしてって……はふっ」

もみ、と股間に軽く触れる女郎。

「やめ、女がそんなモノ……」

「あは、慣れてるから平気。経験人数星の数っすよ、年に二〇〇人とかで一五年はしてるから一〇〇〇本啜えね」

「あぐっ！」

「許して欲しいなら……こう言ってくれる？」

ぼそぼそと、入れ知恵の女郎。青ざめ、ついで顔を赤くする牛次。

「そ、そんなこと……いえるわけない、はぎっ！ いいますっ！」

「懺悔するって」

「へっへー、じゃあ聞かせろよ」

顔を真っ赤にし、震える。坊ちゃんのほうを見るが、助けられる状況ではない。

というか、さっき自分もあんまり助けなかったので助けが来る気もしない。

——い、言うしかねえ……畜生、なんでこんなこと。

「もう潰しちまおうよ」

「せやな。女ごときには、口先で謝っても、懺悔まではいやみただし」

「さっすが！ 男性様は態度がデカイ！」

「ほんじゃ、ぎゅーっと」

「やめてくれえ！」

叫ぶ、叫び、続ける。

「そその、懺悔します！」

震えながら、先ほど伝えられた「懺悔」のセリフを口にする牛次。

「えー、その……女性の皆様のスラリとした美しい股間と違い、お、俺たち男の股間は情けない急所のタマタマが二つもついていて、服を着るのももっこりしていて邪魔です！ 女性の皆さんと喧嘩するとすぐにその目立ちまくりの急所のキンキンを蹴られてあっさりやられるクソザコの男であることを忘れて女性の皆様に逆らってしまい申し訳ありませんでした！ これ以上キンキンを握られるとザコ玉が潰れて男として終わってしまうのでどうか勘弁してください！ 女性様に軽く握られただけで潰れてしまう情けない急所肉玉にお慈悲を！」

屈辱に震える。

一人一人なら負けるわけがない女たちに、数で抑え込まれ、男性性を否定する自虐言葉責めを強いられる、言わされてしまう屈辱。

——ち、畜生、なんで……坊ちゃんが結婚前に一回女郎抱いてみたいとかつまんねーこと言うから……金持ちだからって、村の女とやりまくってたからわざわざ女郎抱く必要なんてねーのに、そのおかげで俺が……女ごときにこんな……あ、やべ、チ○ポ……

牛次が自分の股間の動きに頬を引きつらせる。

チラ、と下を見てしまうまでもなく、並の大きさの牛次のモノが立てば周りの女に気づかれざるを得ない。

パッと華やぐ女たち。

「やだあああ！ このおっさんチ○ポ立ってる！」

「ぎゃははは！ 女にいじめられてチン○ン立っちゃった！」

「ち、ちが……まだ三○前だし、チ○ポは立ってない……はぐっ！」

「きもいわー、こいつ変態だわ。このまま握り潰しちゃう」

「ひiiiiiiiiii！」

「うわ、なんで……や、やめてやってくれよ……」

「やさしいねえお兄さん。でも、女にいじめられて立っちゃう人なんだから、あのままキンキン握り潰されるのもうれしいんじゃない？」

「たまにいるよね、そういうM野郎」

「そ、そ、そんな奴いるか！」

妙に動揺しながら、叫ぶ若者。

それに、大げさに怯える女たち。

「いやん、怖ーい。お股も蹴られちゃったし……蹴り返す番かな。闇のゲーム的に」

「ひっ！ 蹴り返すって……一回と一回でもうチャラだろ？ やめてくれ！」

「あは。嘘ですよ嘘、もう一回蹴っちゃうなんて嘘」

稲が金持ちそうな若者の肩を両手でポンポンと叩き、微笑む。

「あ、そ、そうだよね……はぐっ！」

「はいキーン」

ゴリ、と稲の手慣れが感じの膝蹴りが金持ちそうな若者の股間に減り込む。

「やったー！」

「ぎゃはははは！ タ○キンゲットゲット！」

はしゃぐ女たち。

「あおおおおっ！」

膝を締め、股間を引き、口を鯁張らせるという金的テンプレを見せる若者を指さし、唾を飛ばして笑う稲。

「ぎゃははは！ 油断しすぎ！」

「っていうか、よっぽど「助かった」って喜んじやったんだね」

「糸にすがって、糸が切れて……」

「お連れさんともども、玉無し地獄に転落と」

腰を引いて立ち尽くす若者に、突き出される上体を避けて抱き着くようにしてさらにもう一撃。

ぐりゅ、と嫌な音とともに両睾丸が腰骨に押し付けられ、ギリギリのところであつりと滑って破裂は免れる。

しかし、一步間違えれば去勢もあり得る蹴りである。

「あああああああああああっ！」

響き渡る、男の絶叫。

潰れてもおかしくない膝金蹴りに意識が飛びかける。

にもかかわらず、別に稲としては本気で蹴り潰そうと思いきり蹴ったでもない。

先ほどのが思ったより軽かったので、多少深く蹴り込んだだけの事。

——お、いい当たり……つい二連撃やっちゃった。この反応……ゴリっと、これ下手したら潰れてたな。玉、弱！

「ぷくく、それじゃ、二回やったんで、お兄さんも公平に二回と」

「はんぐうおおおおおおお」

「ぎゃははは！ 聞こえて無くね？」

「あれはタ○キン様、行っちゃったかなあ……」

「まあ霊薬で再生するからドンマイ」

「っていうか、むしろちょん切って女になっちゃうか？ そのほうが楽じゃん？ そんな風にタマタマ蹴りを食らわないという上から目線で男見下ろせるよ」

「チョコキチョコキねー。飽きたら再生すりゃまた男に戻れんだから、いっちょ切ってみっか？」

チョコキチョコキと、女らが股間に手で作ったハサミを当て、動かして見せる。

しつつ、周りの男らの反応を楽しむ。

女たちの集まりを遠巻きに避けて行く旅人や宿の者たち。

睾丸の痛みを感じるだけの生物と化した金持ちそうな若者と、その連れ。

と、なんとなく店の入り口近くに立つ一刀斎。

笑う女たちと、縮む男三人。

切られるものを持つものと、持たない者の隔絶したありよう。

唾をのむ一刀斎。

近くの女郎もチョコキチョコキをやっている。

近いだけに、ニヤニヤしながら一刀斎の顔を覗き込まんばかりである。

「その動きやめてくれよ……」

「あら、一刀斎さまなんで？」

近くにいるのは、先ほど一人連れ込んだ女郎、鶴。

膝を開き、股間を突き出しチョコキンチョコキン。

再び唾をのむ。頬が熱くなるのを感じる。玉が縮む。

「ううう……そりゃお前はそこになにもないから、何の意味もないかもだけど、男はついてるから、自分のがやられるのをどうしても想像しちまう。それこそ、自分が切る側でも……」

「あ、そういえば聞いたことあるよ。奥さんに浮気された男が、間男のチ○ポ切るんだけど、自分で切るのは無理だから女に切らせたって。女ならおチン○ン切るの平気だからって」

「平気じゃないだろうけど……」

「いや、平気っしょ、チン○ンだよ？ 目え抉れ、とかは絶対無理だけど……おチ○ポちょきーんとか、キンキンぐちゃー、とかは余裕でしょ？」

股間の前でチョコキを動かしたり、何か握り潰すジェスチャーをする女郎。一刀斎が顔を赤らめ、膝を締めるのを見て鼻で笑う。

——あは、ビビっちゃってるの、一刀斎さま？ この前宿に来た野盗五人を一瞬で切り倒した、あんな強い一刀斎さまが……女の子におチンチ○狙われたらやばいって、ビビってる？ 男って面白いわー。

わっ、と外で声が上がる。

稲が股間を引き、その前には倒れそうな若者。

稲の二回の蹴りへの反撃を、無理やりやらされたか。

目を見張る一刀斎。

——蹴ったのか……どういう流れだ？ そりゃ「やれ」って本人から言われてたけど、だからって蹴っても意味ねえ。さっきも無駄だったし……相手は玉ついてないんだから。え。

「はうっ！」

「あは！ 一刀斎さまー、お禪特注」

客を引き込んだもう一人の女郎。

一番若く小柄な滝。無害な小動物に見せかけつつ、隙を見せれば毒牙を剥いてくる……そんな妙な印象がある少女。

今も、隙をついてギュッと一刀斎の股間を下から握っていた。

「お、お禪特注って……」

「普通の布だと、絶対入りませんよねー、一刀斎さまの、天下一のおチンチ〇様とおキンキン様は。はい、おキンキンニギニギ」

「はうっ」

ピン、と爪先立ち。

「一刀斎さまー、今エッチ代五回分溜まってるんですけど、どうでしょうかねえ？」

「今度払うよ……はふっ！」

「若い女だからって甘く見てると……一生エッチ代いらぬ体にしちまうぞコラー」

小柄な体にふさわしい華奢な手で、巨玉を器用に握り潰しつつ、背伸びをして耳に熱い息を吹きかける。

「睾丸潰す、睾丸潰す、コーガン潰す、コ・ウ・ガ・ン・つ・ぶ・す」

「あおおおおお！ 滝ちゃんも喜んでたじゃんかよ！」

「確かに一刀斎さま上手でした」

「でしょ？」

「おチ〇ポもご立派で……受け入れは大変だけど、入れたらすごいです、明らかに届いちゃダメなところまで届いたし……」

「でしょ！？」

「でも、仕事だから代金はやっぱり発生します。お金払わないなら、こっちの金で払ってもらいますよー」

「ふぐうううう！」

——いやだ、俺からちょっと払うんじゃないくて、こんな形で払わされたら次々ほかの奴にも払うことになっちゃう、ただマンできるのがここに滞在する最大のメリットなのに……それがなくなるなんて……

ぎゅうううううう、滝の睾丸握り潰し。

小柄な少女の、容赦や遠慮がないというより、自分についていない物なので特に何も考えず全力が出せるという感じの金握りに白目を剥きかける一刀斎。

「さあさあ、タマタマ潰れちゃいますよ？ いいですか？ いいですか？ 潰れるんですよ？ よく考えてください、さっきまでお股の間でブラブラしてた大事なキャン玉急所が女の子の手でグチャッと握り潰されるんですよ？ いいんですか？ やっちゃおうかなー、もうやっちゃおうかなー。いつ

でもやっちゃうぞ、そらそら、きゅつきゅ」

「だれが払うか……ああ、あ、はぐうううううう、は、払うから、払うからっ！」

「まいどありー。やっぱりキ〇タマ握れば男は言いなり……じゃなくて、チン〇ンが大きい人は器も大きいですねー」

玉握りをやめ、すっと上に手を滑らせ、一物を撫でる。

別にこれまでも鬼の形相などはしておらず、微笑んでいたが——その顔で金握り潰しを全力でかませるのだから相当なものだろう——媚びるような人懐っこい笑みに切り替える。

「っていうか、素面で触るとドン引きの大きさですよ」

「熟女はみんな「大きいのがいい」って言うってくれるんだぞ？ 経験豊富な人はさ」

「それは大きい人を喜ばせる手管とも考えられますが……」

「というか、金だけ……若い子に大金持たせるのはアレだから、俺が預かっとかよ。一晩につき、一〇文ずつだけ、直接渡すという事で……」

「一文ってどのぐらいなんですかね？」

「円という**謎単位**で言えば、二十五円ぐらいじゃないか？ だって四千文が一両で、一両十万円ぐらいなんだし」

「前は一文十円とか言ってませんでしたか？ 瓦版売りが……」

「前ってのが何のことを意味するのかちょっと分かんねえなあ……でもそういうこと言ってたやつがいたとしたらおかしいだろ、一文十円じゃ四千文で四万円だから、計算合わねえじゃん。四千文＝一両。一両＝十万だろ？」

「なるほど、それじゃ一〇文は謎単位である「円」で言えば二百五十円ですね？」

「そう。子供なんだからそのぐらいで……大金持たせちゃ悪いからね。それだけずつ渡させてもらおうよ」

それは払っているといえる額ではないだろう。

が、目を輝かせる滝。

抱き着く。

「さすが一刀斎さま……**デ〇チンにしてシブチン**とか、トンチがきいてて最高！ ……好きです！」

「ほんと？ はぐっ！」

柔らかい少女に抱きしめられてドキリとする間もなく、股間に固い物が跳ね上がってくるのに仰け反る。しかし離れられない。

グリ、と睾丸が少女の膝に無理やり動かされるのを感じる。不思議と、じっくり広がる圧倒的苦痛。眩暈と吐き気。そして女の子に男としての自分を否定されたような屈辱に気が遠くなる。

「うんぐううううう」

「好きっていうのは嘘でしたー。エッチ代踏み倒すクソオスは睾丸蹴り潰して去勢豚として売ってやるよ」

「ちょ、まっ、あぐっ！」

ごちゃ、ごちゃ、と密着状態から避ける余地のない膝金蹴りを放つ滝。

その形相は、鬼と見まごうものだった。

チロチロと小ぶりの舌をちらつかせながら、膝金しつつ歌う。

「去勢豚あ、去勢豚あ、キ〇タマ抜かれた肉用家畜ー、大事なモノを抜き取られー、エッチもできず

に食われますー」

「あぐっ！ はぐっ！ やめっ、はら、はらうっ！ やめてっ！」

「ついでに肉ソーセージも高く売れるね。一〇〇両（一両は十万ほど）ぐらいしそう。大きいから！」

本気で潰す気の膝金。

花代を踏み倒そうとすることへの怒りと、自分にはついていないから反撃を受けない圧倒的優位、そして「どうせ玉なんて治るんだから」というすべてを許してくれる——気が、玉がない女にはする——言い訳。

それと……仄暗い快樂。

舌をベローリと垂らし、興奮しきった顔。

「ほらほら、痛い？ キ〇タマ痛い？ 立派なチン〇ンぶら下げた大人のお侍様が、こんな女の子の膝蹴りでその反応？ あは、この……ぎーこ、ぎーこ！ キ〇タマぎーこ！ こんなもんぶら下げて生まれた時点で、ぶら下げてない女の子様にはどうやっても勝てない運命なのよー」

さらに膝を跳ね上げる。着物の下、下帯の前がじっとりと雌蜜で濡れていた。

——ああ最高……いっつも、男ってだけで威張ってる連中をキ〇タマ責めで悶絶させるのって最高の気分。悔しかったら同じことして見なさいよ、ほらほら、あは、こっちには……女の子の股間にはおキ〇タマついてないから無理よねえ。

膝金。

そのまま、反対側の膝の前に伸ばして一刀斎の太い足を挟む。

グリグリと、濡れた股間を擦り付ける。腰を引き、ぶつけさえする。

全然平気だ。

「ほらほら、一刀斎さま。私の股間、蹴ってもいいですよ。蹴り返さないと、去勢豚になっちゃいますよ。玉無し豚ちゃん、あーかわいそう」

「うううう」

挟まれた足を下げ、上げる。が、何の打撃にもならない。

「ぶっ、ぶぶぶ、そんなの攻撃じゃないですよ。あ、一刀斎さまたち、男の人なら攻撃になっちゃうか！ なんとって、おキャン玉ぶら下げてるから！ ぶらぶらー、金の玉ブラブラー」

「ぷ、くくく、もうその辺にしといてあげなさいよ。一刀斎さま女になっちゃう」

「そうになったら一緒に女郎しましょうね」

「や、やだっ！ 女郎なんて……はぐっ！」

「おらー、女郎バカにしやがったなこの腐れチ〇ポ侍がああ」

「あらー、怒らせちゃいましたねえ、鶴姉さん怒らせちゃいましたねえ」

素早く交代するや、一刀斎を突き倒す鶴。

片足を掴み、必殺の金踏み潰しの体勢。

「ちょ、まてよ！ 踏み潰しはマジですぐ潰れる！ 玉が潰れる時って、腰骨とぶつかってきた何かの間に玉が挟まった場合が多いんだよ！ 踏む形だと、すでに玉が腰骨に……おごおおおお！」

「はいはい、静かにしましょうねー」

「ぎゃははは！ 白目剥いた！」

「これが五人十人の荒くれ者をあっという間に切り伏せる達人とはとても思えないねえ」

「あは、もしかしたら一刀斎さま……ドMくんでわざとキ〇タマ潰されたがってるんじゃない？」

「なるほど、謎はすべて解けたわね」

「そして玉はすべて潰れたと」

「それはそれとして、今日は豚肉にしましょうか」

江戸時代には牛肉やら豚肉やは食べなかったような感じだが、この江戸時代のようなファンタジー世界では普通に流通していた。

「キャン玉を抜かれておいしい肉になってくれた豚さんに感謝ね」

白目を剥いて泡を吹く一刀斎の股間を、グリグリと踏みにじりつつ笑う鶴。

しゃがむ滝。

一刀斎の耳元に近づく。

「去勢豚去勢豚、いい去勢豚ができたわー。二個玉潰れて、きょ・せ・い・ぶ・た、のできあがりー。エッチ代踏み倒さなきゃ、男でいられたのにねー」

「エッチ代もいらない節約体質になれてラッキーだったんじゃないね？」

ゲラゲラ笑いつつ、滝が霊薬の小さな壺を一刀斎の口につける。

玉を潰しても、治してやればノーゲーム、それが女たちの考え方だった。

一刀斎としてはとても賛同できないが、何か喋れる状況ではなかった。

体験版終わり

この後、実はドMの金持ちの坊ちゃんが女郎の金蹴りにマジぼれして婚約者を捨てる。

何とかしてくれと頼みに来た父親の前で女同心らに金的責めの一刀斎。

調査に婚約者の村に行き、熟女をうまい事抱いているところに婚約者らがやってきて「間男」として玉潰しを食らう一刀斎。

その話を聞いた坊ちゃんは相手がドSならばと復縁を頼みに行き、破れ鍋にとじ蓋でよりを戻すも、捨てられた女郎たちになぜか一刀斎が玉踏み潰しを食らう……という感じのお話になります。

続きは製品版でお楽しみください